

場として栄えていたが、現在では第2・3次産業への就業機会が少なく、都市機能も未整備な為に、人口流出が著しい。この状況を『田園都市計画』によってくい止めようとしているが、前途は楽観視できない。

町役場を訪れた後、枋窪地区集団移転先にバスで向う。移転によって、男子若年層と女子の就業機会は増えたが、男子の中には、夏の山作業、冬の出稼ぎと、従来の形態を続けている者も少なくない。移転跡地には、『ふるさと村構想』に沿って、自然研修センター・観光産業地帯の形成が進められている。

午後には、再び長井市へ。第2次大戦中、町ぐるみの企業誘致で成立した、マルコン電子KKを訪れた。栗子峠トンネル開通によって、東京の1日経済圏にくみ入れられた事は大きい。その後、長井紬の工場を見学する。長井紬は、200年の歴史を持つが、最盛期は大正時代で、現在の企業数は約20。ここでも、買継商を通して、各地に製品を送り出すシステムである。

今回の巡検は、予定も順調にこなせたが、いつか今度は、季節を変えて、ブドウ栽培作業を見たり、白鷹町枋窪へ行きたいと思う。又、時節柄、寒い3日間ではあったが、私たちの巡検に協力して下さった方々の、暖かい御気持には、深く感謝する次第である。

(4年 黒澤章子)

会津巡検（正井先生）

3月6～8日

関東平野北東部の平野はからっ風を受けて黄土色に枯れていた。抜けて会津の山中に入るとそこは白い雪をかぶって、柔らかなたたずまいを見せていた。雪の落ち着いた様は人の心をほっとさせる優しさを持っている。粉をふきそうなほどにバサバサに乾いた空気の中を歩いて来たあとの雪景色の静かさは殊更だった。おまけに晴れた日だった。雪の優しさは晴れた日に増す。それは女の人の化粧にも似ていた。

雪を見るために出かけた巡検である。会津若松の雪は街にみずみずしさと潤いと若やいだ活気を与えていたし、会津坂下の雪は取残された田舎町の寂しさを空々しい明るさで満たしていたし、喜多方の雪は新興住宅地の添え物としての雪だった。

猪苗代の雪は凄かったと思う。猪苗代駅から南の方、猪苗代湖の方に向かっては、恐らく見渡す

限りのといった雰囲気、田んぼが広がっているのだろうが、そこが一面の雪である。その中を一本のアスファルト道路が延びてその道にボツン、ボツンと家がくっついている。空は晴れているけれども、横なぐりの風に吹き上げられた雪が吹雪のように舞って10m先の視界が利かない。たまさかに通り過ぎてゆくトラックと乗用車の他に物音はなく、細かな凍ってしまった雪をすいこんだ風が私のまわりをぐるぐると廻り続ける。ここでは頭をすっぽりとくるむ毛糸の帽子とたっぷりとしたマフラーがどうしても必要だ。家々の窓は殆どサッシでその密封性を余す所なく発揮できている。必要な場所に必要とされているものがあるのは、ともかく美をつくり出すものの1つに違いないと思った。

“秘境” 大白川は雪の中から掘り出されたばかりだという顔をして私達を迎えてくれたが、その雪は、雪が平然として人間たちと仲良くしている風を装うことさえできるということを教えてくれた。この雪は冬の仕事を奪い、足を奪い、雪崩れをおこし、洪水をおこす雪である。しかしその日の大白川では坊やがお父さんと屋根の雪を降ろし、雪だるまも雪合戦もできそうに見えた。穏やかに山をくるんだ雪は“力”を持つ者のみが見せる大きさを保っていた、と思う。

只見線は有名なローカル線で発車時刻に遅れて走ってくる乗客を汽車が待ってくれるようなものだが、さすがに景色は良かった。乗ってくる女の人が皆美人にみえたのもよかった。しかし、この地域は山あいの谷部に細々と開かれた田畑と自然を売り物の観光とが生きる手段の過疎の地である。開発計画としてあげられているのも道路とゴルフ場とキャンプ場と温泉とスキー場と自然動物園と観光センターの設置など一連の観光計画のみである。他の計画は皆無であるといってよく、過去にさかのぼってみても電源開発があっただけだ。でもそれはそれでいいのかもしれないと思いながら、小出へと向かった。

(3 年 田 辺 ト ヨ)

東 海 巡 検 (式 先生)

10月15日～17日

今回の主な目的は、東海地方における地形及び土地利用の変遷に関して地理学的観察・野外調査を行なうことであった。

柿なども色つき始めた明るい秋の東海の風土に足をふみ入れ、式先生の御指導のもとにさまざまな地域に接し、観察することができた。事前調査がまだまだ不十分であったことが、行く先々で痛